

第2章

セットアップ

RDS-SD Series

USERS MANUAL

第2章 セットアップ

2.1 セットアップ概要

RDS-SD はセットアップ作業を簡素化するため、本体前面にて各項目を選択することで容易に設定できるように設計されています。

特別な場合を除き **SCSLIDの設定のみ**で使用可能です。


なお、誤動作を避けるため実際の使用中においては、設定内容は変更できない様になっています。

2.2 セットアップ画面の使い方

ここでは、セットアップ画面の使い方全般について説明します。

はじめにフロントパネルを取り外して、ドライブの装着状態を確認してください。

はじめてお使いになられる場合は、MODE スイッチを押しながら電源を投入して、RDS-SD の動作状態を保持しているメモリの内容をクリアにしてからセットアップを始めてください。

(MODE スイッチを押さないで電源を投入した場合、「ONE DOWN」、「SYSTEM DOWN」の表示が出る場合があります。)  「はじめに ドライブ装着の確認」

System
Initializing . .

SYSTEM
RELOADING . . .

MODE スイッチと SELECT スイッチを両方押した状態で電源を投入しますと、パラメータ設定モードに入ります。

ARRAY PARAMETERS
SETTING!

MODE スイッチを押すことにより、項目が選択できます。


SELECT スイッチを押すことにより、各項目のパラメータが変更できます。

ユーザー自身がセーブの操作を行うまではセーブされません。

パラメータ設定の開始 : MODE スイッチ + SELECT スイッチ + 電源 ON

パラメータ項目の変更 : MODE スイッチ

パラメータの変更 : SELECT スイッチ

 「2.5 スイッチ操作方法一覧」

セットアップの内容を変更した場合、必ずMODE スイッチとSELECT スイッチを同時に押して、ROM に書き込みを行ってください。

書き込みが終了しますと、

POWER DOWN
PLEASE!!

の表示になりますので電源を切ってください。

書き込み操作を行わずに電源を切った場合、変更した内容は失われ、変更を行う前の状態のままとなります。


書き込み操作終了後、電源を切るか SELECT スイッチを押して通常動作モードにしてください。
(SELECT スイッチは、2~3 秒間押し続けます。)

MODE スイッチを押した状態で電源を投入しますと、RDS-SD の動作状態を保持しているメモリの内容はクリアされますのでご注意ください。(システムリセット状態になります。)

通常動作モードに入る場合は、スイッチを押さずに電源を投入してください。

設定の書き込み : MODE スイッチ + SELECT スイッチ
電源 OFF または SELECT スイッチ

設定の取り消し : 変更中に そのまま電源を切る。

 「2.5 スイッチ操作方法一覧」

2.3 セットアップ画面とその動作

各項目におけるパラメータは、接続するホストおよび業務内容により変更してください。
ここでは、各パラメータにおける RDS-SD の動作内容について説明します。

SCSI ID 設定

SCSI ID
0

RDS-SD の SCSI ID を設定する項目です。

RDS-SD を接続するホスト上で、未使用の SCSI ID を割り当ててください。

表示内容	機 能	備 考
SCSI ID 0 ~ 15	RDS-SD の SCSI ID 番号の選択。 (0 ~ 15 の間で設定。8bit SCSI の場合は 0 ~ 7)	デフォルト 0

リカバー待ち時間設定

RECOVER WAIT TIME 0.1 Sec

リカバー動作は、ホストからのアクセスの合間をぬって行っています。
従って、リカバー中でも運用し続けることができます。
リカバー中において、ホストからのアクセスとリカバー動作の関係を選択します。

表示内容	機 能	備 考
RECOVER WAIT TIME 0.1 Sec	ホストコマンドが連続している間はホストコマンドを優先して、ホストコマンドがなくなって0.1秒以上経過するとリカバー処理を行うモード。 次にコマンドが発行された場合は、一連のコマンドのうち最初のコマンドのみ、最大1リカバー単位の時間待たされます。 リード/ライトコマンド以外や、リードキャッシュにヒットした場合などは待たされません。	デフォルト
RECOVER WAIT TIME 1 Sec	ホストからのコマンドが散発的で、連続していても1秒をしばしば越えてしまうような場合に有効なモード。 アクセスの間隔が時々1秒以上あることが必要です。さもないといつまで待ってもリカバーが終了しません。	
RECOVER WAIT TIME 10 Sec	通常使用しません。 めったにアクセスが発生しないような使用環境では有効かもしれません。	

リカバーLBN 設定

RECOVER LBN 128KB

リカバーサイズのLBN (Logical Block Number)の設定で、リカバーを行う場合の1リカバー単位あたりの書き込み(実際はWrite & Verify をドライブが行う)サイズの設定です。

表示内容	機 能	備 考
RECOVER LBN 64KB 128KB	設定サイズ単位でリカバーを行います。 設定値を大きくとれば、リカバー終了時間を短くすることができます。 ただし、1リカバー単位当たりの処理時間は長くなります。 (「64KB」で20mS程度)	デフォルト 128KB

Silicon Disk容量設定

SILICON DISK xGB

使用するメモリの容量により決定します。
(デフォルトより変更しないでください。)

機種名	表示内容	備考
RDS-SD25	SILICON DISK 256MB	テスト用
RDS-SD100	SILICON DISK 1GB	デフォルト
	SILICON DISK 1GB (2)	
RDS-SD200	SILICON DISK 2GB	デフォルト
	SILICON DISK 2GB (2)	
RDS-SD400	SILICON DISK 4GB	デフォルト
	SILICON DISK 4GB (2)	
RDS-SD800	SILICON DISK 8GB	デフォルト

ライトキャッシュモード設定

WRITE MODE PENDING 0.1Sec

ここでは、キャッシュからドライブへの書き込みを行うタイミングを設定します。
ただし「ONE DOWN」の時は、この設定に関わらず全て「WRITE MODE WAITING」になります。
Silicon Disk 部に対する書き込みは、常に直ちに終了します。

表示内容	機 能	備 考
WRITE MODE WAITING	ドライブに対する書き込みが終了するまで待ってから、ホストのコマンドを終了するモード。 ライト時には、キャッシュが機能しませんので、転送速度は「WRITE MODE PENDING」モードに比べて落ちますが、リード転送速度は、「WRITE MODE PENDING」モードとほぼ同等です。	
WRITE MODE BUFFERED	データをキャッシュメモリに取り込んだ状態で、ホストのコマンドの終了と同時にドライブへの書き込みを開始するモード。	
WRITE MODE PENDING 0.1Sec	データを受け取ってホストのコマンドを終了した後、0.1 秒たってから他のコマンドの合間をぬって書き込みを行うモード。 シーケンシャルライト等においては、キャッシュ上でライトデータをつなげていき、ホストから複数のライトコマンドで受け取ったデータを1回にまとめて書き込む等により、書き込み時間の短縮が計れます。	デフォルト
WRITE MODE PENDING 1 Sec	書き込みまでの待ち時間を1秒にしたモード。 ホスト側のタイミングにより、0.1 秒にまたがるシーケンシャルライト等がある場合に有効です。	
WRITE ALL PENDING 0.1Sec 1 Sec	「ONE DOWN」時にもキャッシュを有効にするモード。	

ベリファイモード設定

VERIFY WAIT READ aft WRITE

ベリファイモードをベリファイ終了まで待つ「VERIFY WAIT」と、Write コマンドと同様の処理を行い、ベリファイしないモード「NO VERIFY」のいずれかに設定します。

また、書き込み後のキャッシュデータを無効にしてリードリクエストがあった場合、再度ドライブから読み出す「READ aft WRITE」と、書き込んだデータをそのまま有効なデータとしてリードリクエストに対して、ドライブから読まずにキャッシュ中のデータを返す「NO READ aft WRT」のいずれかを設定します。

Silicon Disk 部に対しては、常に「NO VERIFY NO READ aft WRT」です。

表示内容	機 能	備 考
VERIFY WAIT	Write の場合、キャッシングしていたとしても Write & Verify コマンドを受け取ると Write の終了待ちをするモード。	デフォルト
NO VERIFY	Write & Verify を単なる Write コマンドとして処理するモード。ただし、Verify コマンドでは、通常のベリファイを行います。	
READ aft WRITE	Verify コマンドのかわりに Write した後、Read してデータを確かめる場合がしばしばあります。 このためには書き込むデータをキャッシュ中から捨て、リードリクエストがきた時、先に書いたデータをドライブから読み込まないと意味がありません。 そのためこのモードでは、キャッシュ中の Write したデータは全て無効にします。	デフォルト
NO READ aft WRT	本来ライトキャッシュをする場合には、ドライブの書き込みを待たずに正常に書けることを前提にしています。 これは RAID-1 の場合、同時に 2 台のドライブがダウンすることはないという仮定に基づいている訳です。この考え方からすると、書いたものはそのまま読み出せるものと仮定することも 1 つの方法です。 この設定では、そのような仮定により書き込んだ後もキャッシュ中のデータを有効にします。	

LUN SIZE 設定

LUN SIZE FULL

表示内容	機 能	備 考
LUN SIZE FULL	ディスク(RAID-1)全体を1つのLUNとして扱います。	デフォルト
LUN SIZE 2 GB ~ 32 GB (2GB づつ ステップ)	ディスク(RAID-1)全体をLBA 0 から容量ごとに分割して扱います。 1GB=1024MB	
LUN SIZE 2000 MB 4000 MB	ディスク(RAID-1)全体をLBA 0 から2000MBで分割して扱います。 OSの関係から、2GB/4GBより小さな容量で分割します。	
LUN SIZE 1/2 ~ 1/7 DIVISION	ディスク(RAID-1)全体を1/2、1/3、1/4、1/5、1/6、1/7の等分割で扱います。	

LUN MODE の設定

LUN MODE DIRECT

表示内容	機 能	備 考
LUN MODE DIRECT	LUN=0 が Silicon Disk、LUN=1 以降がディスク(RAID-1)に選択されます。	デフォルト
LUN MODE SWAP	LUN=0 がディスク(RAID-1)、LUN=1 が Silicon Disk、LUN=2 以降がディスク(RAID-1)に選択されます。	

データ先読み設定

READ AHEAD 64 KB

リードコマンドにおいて、リクエストされているデータよりどのくらい余分にキャッシュの中にリードしておくかを設定します。

Silicon Disk 領域は、すべてメモリ内にあるため、ディスク(RAID-1)領域に対してのみ有効です。

表示内容	機 能	備 考
READ AHEAD 0 KB	全く先読みしません。 リードに対するキャッシュ効果は、ほぼ0です。 ただし、ディレクトリ等、頻繁にアクセスされる領域はヒットするかもしれません。	
READ AHEAD 8 KB	ページ終了まで先読みするモード。 キャッシュは、バッファセグメント単位(ページ)で管理されています。 ランダムアクセス主体のオペレーションで有効です。	
READ AHEAD 64 KB	リクエストされているデータのあるページの終了までと同時に次のページの終了まで読んでおくモード。 シーケンシャルアクセス主体のアプリケーションの場合に有効です。	デフォルト
READ AHEAD 256 KB	64KB の場合より、さらに1 ページもしくは256KB/ページサイズで決まるページ数分先読みします。 シーケンシャルアクセスが、ほとんど画像データアクセスの場合などで有効です。	
READ AHEAD 1 MB	1MB/ページサイズで決まるページ数分先読みします。 数十MB 以上のシーケンシャルアクセスが、ほとんどの場合などで有効です。	
READ AHEAD 4 MB	4MB/ページサイズで決まるページ数分先読みします。 ファイルシステムを使用せず、初めから終わりまで順番にアクセスする場合などで有効です。	

ドライブタイプ設定

DISK TYPE
30GB 5400rpm

使用するドライブの機種を決定します。

(実際に搭載されているドライブ型式とは異なる場合がありますが、デフォルトより変更しないでください。)

機種名	表示内容	備考
RDS-SD100	DISK TYPE 30GB 5400rpm	デフォルト
RDS-SD200		
RDS-SD400		
RDS-SD800		

2.4 バックグラウンドパラメータ解説

RDS-SD は、工場出荷時設定用とメンテナンス用にバックグラウンドパラメータを持っています。特別な場合を除き、なるべくデフォルトにてお使いいただくことを推奨します。

2.4.1 バックグラウンドパラメータ設定方法

設定変更を行う場合、目的を十分理解した上で行ってください。

1. MODE スイッチと SELECT スイッチを両方押しながら電源スイッチを押します。

ARRAY PARAMETERS
SETTING!

2. 次に SELECT スイッチを押します。

Firm Ware is
Ver.x.xxx

RDS-SD のファームウェアバージョンを示します。

3. SELECT スイッチを押します。

Vendor ID is
TEXA

ベンダーID を示します。

4. SELECT スイッチを押します。

Product ID is
RDS-SDxxx

RDS-SD シリーズのデバイス ID を示します。

5. SELECT スイッチを押します。

Serial No ID
xxxxxxxx

RDS-SD のシリアル番号を示します。

6. SELECT スイッチを押します。

End of
Fixed Parameter

固定パラメータの終了を示します。

以降、MODE スイッチを押すことにより、バックグラウンドパラメータモードに入ります。ファームウェアバージョン、ベンダーID、デバイス ID、シリアル番号のいずれかの表示が出ている時、MODE スイッチを押して、バックグラウンドモードに入ることも可能です。(枠の中の表示はデフォルトです。)

以下、順次 MODE スイッチを押すことで、バックグラウンドパラメータの内容が変わります。

ホスト側 SCSI の最大同期転送速度設定

Max Sync Speed
80/160 MB

80/160 MB、40/80 MB、20/40 MB、
Narrow → Wide 10/20 MB、5/10 MB

ホスト側 SCSI の最大同期転送速度の設定です。SCSI ケーブル等の問題で、通信トラブル(ハングアップやパリティエラー等)が発生する場合、設定をより低い値に変更することで回避できる可能性があります。また、ディジチチェーン等を行った場合、SCSI ケーブル長の問題で通信トラブルが発生することがありますので、その場合についても有効です。☞「第1章 1.7 他の機器の増設」

他社製 Ultra SCSI 機器をディジチチェーンする場合、通信エラーが発生する可能性が考えられますのでご注意ください。

Low Voltage Differential Mode で最大転送速度は160MB/Sec ですが、シングルエンデッドのホストインターフェイスボードや SCSI 機器を接続すると、最大転送速度が40MB/Sec となります。この場合、SCSI ケーブルの総延長を1.5m 以内にしてください。

ドライブ側最大同期転送速度設定

Max Disk Sync Ultra DMA 66MHz

「66MHz」に固定されています。

ホスト側SCSI Bus サイズ設定

SCSI Bus Size 16 Bits

8 Bits、16 Bits

Wide SCSI(68 ピンケーブル)の場合は、「16 Bits」、Narrow SCSI(50 ピンケーブル)の場合は、「8 Bits」に設定します。

ライトリトライモード設定

WRITE RETRY MODE

NO WRITE RETRY MODE、
WRITE RETRY MODE

NORMAL モードでのリード/ライトの際、エラーが発生すると一時的にリカバー動作に類似した動作を行うことにより、コントローラ内部で復旧処理を行うように制御されています。

「WRITE RETRY MODE」は、エラーを検出した時点で、一時的にリカバー動作に類似した動作を行い、「NO WRITE RETRY MODE」は、エラーを検出した時点で、即 ONE DOWN 状態に遷移します。☞「第4章 4.10 リトライエラー検出機能表示/ドライブ SENSE DATA 表示」

同期ネゴシエーション設定

NO NEGOTIATION Auto SP Sync

NEGOTIATION Force SP Sync、
NO NEGOTIATION Force SP Sync、
NEGOTIATION Auto SP Sync、
NO NEGOTIATION Auto SP Sync

これらは、2つのパラメータの組み合わせで設定します。

「NEGOTIATION」は、ホストが動作中に RDS-SD のみに電源 ON/OFF が発生した場合等、ターゲット(RDS-SD)からイニシエータ(ホスト)に対して同期のネゴシエーションを行い、「NO NEGOTIATION」の場合は行いません。通常、「NO NEGOTIATION」で使用します。

「Auto SP Sync」は、ドライブに対して Mode Select コマンドを発行して、強制的にスピンドル同期をとらせるモードです。通常「Auto SP Sync」で使用します。

「Force SP Sync」は、まれに自動同期でないドライブを使用して、スピンドル同期信号を使用したい場合のみ設定します。(オプション)

Restore Pointers 設定

WITHOUT RESTORE POINTERS

WITHOUT RESTORE POINTERS、 WITH RESTORE POINTERS
--

OS によってはリセクション後に、Restore Pointers Message を発行すると問題が発生します。本モードは、このメッセージの発行を禁止するためのモードです。

コマンドキューイング設定

WITHOUT CDB QUEUING

WITH CDB QUEUING、 WITHOUT CDB QUEUING
--

コマンドキューイングを有効にするか無効にするかの設定です。

Silicon Disk部に対するコマンドは、常に直ちに実行されるのでキューイングで速度低下しますが、ディスク(RAID-1)部で有効です。

Silicon Disk部の速度を最優先する場合は、キューイングなしで使用してください。

基本的には、互いに独立した複数プロセスが、ディスクアクセスを連続的に実行している環境で有効です。

但し、OS がコマンドキューイングに対応していない場合、この設定は意味を持ちません。

実際に効果を得るためには、UNIX、Windows NT、Windows 2000、Windows XP、LINUX 等が必要です。

複数プロセスを同時進行している環境で、ディスクアクセスが連続的に発生している場合は、「WITH CDB QUEUING」にするとプロセスの実行切り替えがスムーズになることが多く、操作性が向上する場合があります。

単一プロセスで動作している場合は、場合によって遅くなる場合がありますが、複雑なデータベースアクセスでは、単一プロセスでも効果が出る場合があります。

RAID の内部キャッシュ処理能力は単一HDD よりも強力ですので、ホストCPU の性能によってはコマンドキューイングの処理オーバーヘッドによるCPU の処理速度低下の方が大きく、全体として処理速度が低下することもあります。

処理速度を気にするアプリケーションを使用する場合は、そのアプリケーションの処理速度を「WITH CDB QUEUING」、「WITHOUT CDB QUEUING」それぞれで測定し、比較して速度の速い方を選択する事が有効です。

パリティモード設定

ENABLE PARITY

ENABLE、DISABLE

パリティを有効にするか無効にするかの設定です。

1 電源、2 電源切り替え設定

Two Power Unit	One、Two
----------------	---------

1 電源で使用する場合は、「One Power Unit」、2 電源で使用する場合は、「Two Power Unit」に設定します。

バッファセグメントサイズ設定

BUFFER SEGMENT SIZE 32KB/CH	8KB/CH、16KB/CH、32KB/CH、64KB/CH
-----------------------------	--------------------------------

ドライブ1CH 当たりのバッファセグメントサイズの設定を行うモードです。

1 回のコマンド発行時のデータブロックサイズが大きい処理を行う場合、大きな値に設定することでシーケンシャルの転送速度が上昇します。

逆にブロックサイズが小さなアクセスの場合、特にランダムアクセスが多発するような環境の場合、小さく設定することで転送速度が(Write)が上昇します。

いずれもシステムの環境に合わせて設定してください。

・本項目から、「キャッシュ制御設定」までは、ディスク(RAID-1)に対してのみ有効です。

リトライ開始時間設定

RETRY MAXIMUM TIME 10S	25S、10S、5S、1S、0.1S
------------------------	--------------------

タイムアウトによるリトライを開始するまでの時間を設定します。

この時間の2~3倍程度が実際の処理時間となります。(「1S」、「0.1S」は、TEST用)

何らかの障害により、リトライ処理中にOS側からのタイムアウトが先に発行されるような場合、OS側のタイムアウト時間を長く設定してください。

シーケンシャルリスト設定

SEQUENTIAL LIST SIZE 8	4、8、16、32
------------------------	-----------

シーケンシャルアクセスか、ランダムアクセスかを判断する表の大きさの設定です。

同時に発生するストリーム(シーケンシャルアクセス)の数と、キャッシュメモリの大きさから決定します。

シーケンシャルアヘッド設定

SEQUENTIAL READ AHEAD 8 TIMES

2、4、8、16、32

シーケンシャルアクセスの先読み長(Read Ahead)は、固定先読み長か、この数とアクセスサイズの積のいずれか大きい方の長さを使用しています。値が大きいとキャッシュを大量に消費します。一般的にホスト側の転送能力が低いと小さな値、能力が高い場合に大きな値に設定します。

キャッシュ制御設定

DPO/FUA BIT ENABLE

ENABLE、DISABLE

SCSI 規格のキャッシュ制御用のフラグを有効にするか無効にするかの設定です。

DPO (Disable Page Out) : そのコマンドの実行によって、キャッシュ上にある他のデータを書き換えてよいかどうかを指定します。

FUA (Force Unit Access) : そのコマンドの実行時に、ドライブアクセスを強制するかどうかを指定します。

詳細については、SCSI-2 規格書等を参照ください。

Power On スタンバイ時間設定

WAIT POWER ON TIME 15S

1S、5S、10S、15S、20S

ドライブによっては、電源投入時しばらくアクセスできない場合があります。この間、レイドコントローラは、ホストからのコマンドに対してアクセスすることなく(例えば、Test Unit Ready に対しては Not Ready)応答します。

ドライブReady 待ち時間設定

HDD WAIT READY TIME 1 MIN

1 MIN、3 MIN、5 MIN

ドライブの Ready を待つ時間の設定です。電源投入後、一定時間経過してもドライブが Ready にならない場合 DOWN 処理しますが、先頃の高回転ドライブによっては、Ready になるまで非常に長い時間を要する場合があります。

キャッシュメモリのチェック時間設定

CHECK CACHE NORMAL

NORMAL、FAST、NO

電源投入後、バックグラウンドでのキャッシュメモリの高速チェックと通常チェックとの切り替えです。

搭載キャッシュメモリの容量が大きくなるとチェック終了まで時間がかかりますので、通電後早い時間にキャッシュを有効にしたい場合は、「FAST」に変更してください。

「NO」に設定した場合、電源投入後メモリチェックのみを行いません。頻繁にパフォーマンス測定等を行うような場合ご使用下さい。

なお、「NO」に設定されていても、本来のキャッシュの動作は変わりません。

HDD パトロール機能設定

AUTO HDD PATROL

NO、AUTO

常にバックグラウンドでディスク面のリードチェックを行います。


NO : Auto Patrol しません。

AUTO : Auto Patrol Mode に入ります。

ホストからのアクセスの合間をぬって、LBA 0 から順に Disk Read を行います。

リードできないセクタが発見された場合、他のドライブから生成したデータを書き戻して復旧します。(Rewrite 機能)

パトロールモードは稼働中に切り替えが可能です。

 「第4章 4.8.3 Patrol Mode 切り替え表示」

パトロール待ち時間設定

SYSTEM PATROL WAIT 5S

10S、5S、3S

何秒ごとにパトロールするかの設定です。

1回のパトロールは、バッファセグメントサイズで設定されたサイズで実行されます。

次に、MODE スイッチを押すことで、フォアグラウンドパラメータに移ります。

2.4.2 パラメータ確認方法

パラメータの設定内容は動作中にも確認することができます。
 フロントパネル上のMODEスイッチとSELECTスイッチの両方を同時に押してください。
 最初にFirmwareのバージョンが表示され、以下MODEスイッチを順次押すことによって設定内容が表示されます。

< 出荷時の初期設定 >

PARAMETER	LCD Display	備 考
Firm ware	Firm Ware is Ver. x.xxx	Ver.UP されるごと変わります。
Vendor ID	Vender ID is TEXA	
Model No	Product ID is RDS-SDxxx	モデルにより異なります。
Serial No	Serial No ID xxxxxxxx	製品により異なります。
SCSI Bus Size	SCSI Bus Size16 Bits	
Max Sync	Max Sync Speed 80/160 MB	
Max HD Sync	Max Disk Sync Ultra DMA 66MHz	固定されています。
Disk	DISK TYPE 30GB 5400rpm	
LUN Mode	LUN MODE DIRECT	
Silicon Disk	SILICON DISK xGB	モデルにより異なります。
SCSI ID	SCSI ID 0	
LUN Size	LUN SIZE FULL	
Read Ahead	READ AHEAD 64 KB	
Recover Wait	RECOVER WAIT TIME 0.1 Sec	
Write Mode	WRITE MODE PENDING 0.1Sec	
Retry Time	RETRY MAXIMUM TIME 10S	
DPO/FUA	DPO/FUA BIT ENABLE	
Recover LBN	RECOVER LBN 128KB	
Power On Wait	WAIT POWER ON TIME 15S	
Wait Ready	HDD WAIT READY TIME 1 MIN	
Sequential Ahead	SEQUENTIAL READ AHEAD 8 TIMES	
Check Cache	CHECK CACHE NORMAL	
Auto Patrol	AUTO HDD PATROL	
Patrol Wait Time	SYSTEM PATROL WAIT 5S	
Write Retry	WRITE RETRY MODE	
Negotiation	NO NEGO FROM T Auto SP Sync	
Restore pointers	WITHOUT RESTORE POINTERS	
Queuing	WHITOUT CDB QUEUING	
Parity	ENABLE PARITY	
Power	Two Power Unit	
Buffer Segment	BUFFER SEGMENT SIZE 32KB/CH	
Sequential List	SEQUENTIAL LIST SIZE 8	
Verify Wait	VERIFY WAIT READ aft WRITE	

2.5 スイッチ操作方法一覧

RDS-SD のスイッチ操作方法を以下に示します。

項 目	操 作	
強制リセット	MODE + 電源ON	
警告ブザーの停止	MODE	
パラメータ設定	開 始	MODE + SELECT + 電源ON
	項目の変更	パラメータ設定中 MODE
	内容の変更	パラメータ設定中 SELECT
	設定の書き込み	パラメータ設定中 MODE + SELECT
	設定の取り消し	変更中にそのまま電源を切る。
ステータス情報	パラメータ内容確認	動作中 MODE + SELECT MODE で、順次確認できます。
	エラーステータス確認	動作中 SELECT MODE + SELECT で解除。
	リトライ表示消去	動作中 MODE + SELECT 2回押す。
	パフォーマンス情報	パラメータ内容確認中 SELECT MODE で、各ドライブを順次確認できます。
	キャッシュメモリ確認	パフォーマンス確認中 MODE
	PATROL Mode 切り替え (Auto、Force、No)	パフォーマンス情報確認後 MODE SELECT で、切り替える。

